

政策創造研究科

I 2020年度大学評価委員会の評価結果への対応

【2020年度大学評価結果総評】(参考)

政策創造研究科における教育課程・学習成果の自己点検・評価および教員・教員組織の評価については、いずれも昨年度に引き続き良好な運営がなされている。研究科内のFD活動については、2020年度にFD委員会を設置したことは高く評価できるが、研究活動や教員交流などの活性化については委員会が有効に機能するよう一層努めることが望まれる。研究活動や社会貢献などの諸活動については、その活性化や資質向上を図るためにすでに実施している方策は、研究科全体として取り組みができており、教員・院生双方の意欲を高めているという観点から、高く評価できる。この取り組みを今後も継続していくことが望まれる。

今回の評価項目から外れた他のすべての項目に関しても、中期目標の実現に向けて継続的に取り組むことを期待したい。

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2020年度の事業評価を受けて、継続的に研究科の運営の向上に努めていくと同時に、大学院の再編にも積極的に対処していく。研究活動や社会貢献などの諸活動については、本研究科の特徴である学際性を考慮した取り組みがなされている点を評価戴いた。また資質の向上および中期目標の実現に向けた取り組みとして行っている学生ニーズの把握という点の評価も戴いた。

研究活動や社会貢献等の諸活動については、当研究科の学際的な特徴を鑑みると、まずは9プログラムそれぞれでの活動強化が主軸となる。そのうえで研究科主催シンポジウム、同窓会シンポジウムを実施し、統合的な研究活動や社会貢献等の強化を図ってきた。さらに、当研究科の特徴としては、横断プロジェクトがある。当研究科は地域づくり大学院を標榜しているが、横断プロジェクトは、ゼミの枠組みを越えて学生が連携し、全国各地の地域へ特色あるプロジェクトを行ってきた。ただただ2020年度においてはコロナ禍により、上記の試みは一部でしか実施できなかったが、収束した際には改めて研究活動や社会貢献等の諸活動の充実を図っていきたい。

ご指摘戴いたFD活動については、新設したFD委員会を中核として、一層の具体的なFD活動の強化を図っていく。とくにオンラインを使用しての授業に関しての学生からの意見を聴取し、さらな教育環境の改善へとつなげていきたい。研究活動や社会貢献等の諸活動については、2020年度の事業評価を受けて当研究科のコンセプトおよびカリキュラムなどの再考を行っていく必要があるだろう。確かに当研究科は設置以来、定員の充足では成果を上げてきたが、大学院全体を俯瞰してのポジショニングを明確にしなければならない。

新規の教員採用については、継続的な研究科の運営、大学院の再編を考慮しながら対応していきたい。

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

政策創造研究科は、地域づくり大学院を標榜し、全国各地において、都市・地域・組織の今日的な課題に解を示すべく特色ある横断的プロジェクトを実践してきた。2020年度、コロナ感染拡大によりこうした活動に大きな制約がかかってしまったことは残念であるが、2021年度は大学院生と協力し、上記諸活動を一層の充実させることを期待したい。

FD活動に関しては、大学院生のゼミ長会からの意見聴取やFD委員会における検討を重ねつつ、とくにオンライン授業の質的改善を図ってきたこと、また研究活動や社会貢献等の諸活動について当研究科のコンセプトやカリキュラムを継続的に点検している点は評価できる。

II 自己点検・評価

1 教育課程・教育内容

【2021年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

①修士課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本研究科では修士課程においても、多様な社会人を主要な対象とし収容定員も多いため、コースワークを基本にすえて教育しているが、修士論文作成には指導教員を中心としたリサーチワークの機会を幅広く提供している。 ・教育課程の編成・実施方針に基づいて、「群」と「プログラム」からなる教育課程を体系的に整備するとともに、授業科目を適切に配置するよう努めてきている。 ・コースワークにおいては、各プログラムの専門科目の他、政策科学の学問的基礎となる「政策分析の基礎」「政策ワークショップ」を必修科目に、「研究法」「調査法」「質的調査法」等を選択必修科目とし、研究に必要な専門知識及びスキルの修得を図る。さらに、2020年度には分析手法に関する授業科目の改善についてのゼミ長会の意見を反映して教務委員会が検討し、2020年度に「質的調査法」「フィールドワーク演習」を新設した。ただし「フィールドワーク演習」に関しては2020年度はコロナ禍のため休講、2021年度も休講予定である。 ・リサーチワークとしては、各プログラム演習において研究及び論文指導を行っている。また、講義科目の中で、修士論文と連携させた、各自の研究テーマに応じたリサーチ課題を課し、その発表内容を授業内で評価対象にするなど、体系全体でのコースワークとリサーチワークの連携にも留意している。また、入学時点の研究計画書を群で共有し、群の教員が講義等を通じてゼミの学生に研究支援を行えるようになっている。 ・横断ゼミプロジェクトでは、全国各地でのフィールドワークやWEBアンケート調査等の特色あるリサーチを実施し、ゼミの枠を越えたリサーチワークに取り組み、その成果報告書も作成しているが、2020年度はコロナ禍のため一部の実施に留まった。 	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2020年度より社会的ニーズの変化及び教員の専門領域に対応し、プログラム名を一部変更した。 <p>中小企業経営革新プログラム⇒企業経営革新プログラム CSRプログラム⇒CSV・サステナビリティ経営プログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プログラム名の変更とともに一部の科目の改廃を行った。 ・学生から要望の多かった「質的調査法」を新設。また学生の受講希望が多い「研究法」について、きめ細かい指導を実施し、学生の利便性を図るため、異なる曜日・期で2回設定。 ・文化・都市・観光創造群において各プログラム共通の科目として「フィールドワーク演習」を新設。 ・時代の変化に対応し、「SDGsと企業経営」、「ダイバーシティ経営」を新設。 <p>なお、授業科目の改廃については、以下の基本方針により実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生からの要望をゼミ長会等で把握し、その結果を科目に反映する。 ・ディプロマポリシーに基づき、基本科目に専門知識と基礎的な研究スキルを習得する科目を設置する。 ・特定の曜日に集中している開講科目の分散を図るとともに、少数履修の科目については隔年開講とする。 ・外部講師への委嘱を削減するとともに、各群の科目数を均等化する。 	
②博士後期課程において授業科目を単位化し、修了要件としていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>【根拠資料】 ※「はい」を選択した場合に単位化及び修了要件として設定されていることが確認できる資料を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究科ガイド、シラバス 	
③博士後期課程においてコースワーク、リサーチワークを適切に組み合わせ、教育を行いますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※コースワーク、リサーチワークを組み合わせた教育課程の概要を記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・博士後期課程は学位授与、すなわち博士論文提出を目標としている。博士論文作成には独創的な研究論文の作成に向けたリサーチワークが中心となるが、研究論文作成に向けた基礎的な知識や分析手法をコースワークによって教育することとしている。リサーチワークについては、博士学位基準要件として、査読論文に関し、原著論文 1.0 ポイント、研 	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

究ノート等 0.5 ポイントの基準で合計 2.0 ポイントになっているが、この査読論文の作成がリサーチワークの具体的な目標として機能している。「研究法」「合同ゼミ」「外国語文献講読」の 2 科目を博士後期課程学生の必修科目としているほか、指導教員担当科目の受講を義務付けている。また、各ゼミで担当教員が個別に時間を設定し研究指導を行っている。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・博士学位基準をさらにレベルアップし、厳密に運用するために、以下の内規を追加した。
 - (1) 少なくとも 1 ポイント分については、博士後期課程在籍中に執筆し、査読雑誌（日本学術会議協力学術研究団体、もしくはそれ相当と認められる団体のもの）に掲載された査読論文（研究ノート、事例研究等を含む）であり、博士論文に転載されていること
 - (2) 2 ポイントに必要な残余のポイントについては、上記(1)の要件と異なり、博士後期課程入学前に投稿した論文を含め、学位に求められる高度の研究能力及び豊かな学識を担保する査読論文（同上）であること
 - (3) 英語の査読論文については、博士学位基準の外国語要件としても同時に審査に提出することを認める
- 2020 年度は上記を運用した。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・研究科ガイド

④専門分野の高度化に対応した教育内容を提供していますか。

S A B

※学生に提供されている専門分野の高度化に対応した教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

【修士】

・当研究科では、多様な背景を有し、かつ極めて実務的な専門性が高い社会人学生を対象に、なおかつ現状をよりさらに高度な職業専門能力が醸成できるよう、9つの専門領域に特化したプログラムによる教育体系を実現している。プログラムが専門領域に特化していることで、ニーズの多様化、専門分野の高度化に迅速に対応できている。また、単にコースワークで充足させるのではなく、全国各地でのフィールドワークや WEB アンケート調査等の特色あるリサーチワークと融合することで、より実践的な高度職業専門能力が醸成できている。また専門領域の各界で著名な有識者のゲストスピーカーの招請や非常勤講師の採用などでも対応している。

【博士】

・博士後期課程については、9つの専門領域に特化したプログラムがコースワークを基本としながらも、それぞれの専門領域の学問的知見につながる高度なリサーチワークを実施している。博士後期課程の修了要件として、査読論文に関し、原著論文 1.0 ポイント、研究ノート等 0.5 ポイントの基準で合計 2.0 ポイント「少なくとも 1 ポイント分については、博士後期課程在籍中に執筆し、査読雑誌（日本学術会議協力学術研究団体、もしくはそれ相当と認められる団体のもの）に掲載」になっているため、それぞれの学問領域の学会発表、学会誌への投稿がリサーチワークの具体的な成果指標として機能している。

【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

- ・適正なプロプログラム配置がなされているか等についての議論を始めた。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

- ・シラバス、研究科ガイド

⑤大学院教育のグローバル化推進のための取り組みをしていますか。

S A B

※大学院教育のグローバル化推進のために行っている取り組みの概要を記入。

【修士】

・海外から留学生を積極的に受け入れている。導入科目である「研究法」について、2016 年度より中国人留学生向けの「研究法（中国語）」が追加されている。また当研究科独自の制度であるディレクターのきめ細かい個別相談によって、生活相談まで対応している。またチューター制度も機能させている。

【博士】

・外国語文献講読を博士後期課程の必修としている。海外での研究発表も随時、学生に指導している。2018 年度には、博士論文の学位授与基準を厳格化し、外国語での研究発表についてポスターセッションを外している。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。	
・特になし	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
・シラバス、研究科ガイド	
1.2 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	
①学生の履修指導を適切に行っていますか。	S A B
※履修指導の体制及び方法を記入。	
【修士】 「ディレクター」を置いて、きめ細かい履修指導が行えるような体制を取っている。基本的には院生を教員がマンツーマンで指導する体制が整えられており、履修指導や学習指導を入念に行っている。 ・履修指導と学習指導に関しては、入学前後のガイダンスはもとより、指導役の教員が弾力的に相談に応じられるような体制を整えている。特に、当研究科の特徴として、入学時点からプログラム（ゼミ）に所属し、長期間指導教員との関係性が構築されるため、学生に対し親身できめ細かい対応が可能である。 ・同窓会シンポジウムを毎年実施することで、修了生とのネットワークを強化し、日常的に修了生からアドバイスももらえる体制を整えている。	
【博士】 ・上記の修士の体制に加え、個別のリサーチワークに対応できるよう、指導教員がきめ細かい個人相談を随時実施している。	
【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。	
・2019年度に研究科同窓会と教員が連携し、同窓会が卒業生への連絡先を把握し、連絡する体制を整えたが、2020年度はコロナ禍のため実施できず。データベース構築も視野に入れている。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
・特になし	
②研究科（専攻）として研究指導計画を書面で作成し、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。	はい いいえ
※ここでいう「研究指導計画」とは、事務手続きのスケジュールやシラバス等の個別教員の指導計画を指すのではなく、研究科としての研究指導体制及び研究指導スケジュールをまとめたものを指します（学位取得までのロードマップの明示等）。また、「あらかじめ学生が知ることの状態」とは、HPや要項への掲載、ガイダンスでの配布等が考えられます。	
【修士】 ・学位取得までのプロセスは研究科ガイドに、各プログラムの研究指導方針はあらかじめシラバスに明記されている。	
【博士】 ・学位取得までのプロセスは研究科ガイドに、各プログラムの研究指導方針はあらかじめシラバスに明記されている。	
【根拠資料】 ※研究指導計画が掲載された文書・冊子等の名称を記入。	
・研究科ガイド、研究科シラバス	
③研究指導計画に基づく研究指導、学位論文指導を行っていますか。	はい いいえ
※組織的な研究指導、学位論文指導の概要を記入。	
【修士】 ・研究指導計画に基づき、研究指導、および学位論文指導を、個人別指導・演習内発表会・中間発表会を組み合わせ、教員が適切に行っている。 ・研究指導及び学位論文指導については具体的に、個々の担当教員が個別に指導に当たるほか、ゼミ内でも発表会を開催して院生相互の議論を推進している。また、研究科全体で中間発表会を開催し、複数の教員による研究指導を行っている。	
【博士】 ・研究指導計画に基づき、研究指導、および学位論文指導を、個人別指導・演習内発表会・中間発表会を組み合わせ、教	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

員が適切に行っている。	
<ul style="list-style-type: none"> 研究指導及び学位論文指導については具体的に、個々の担当教員が個別に指導に当たるほか、ゼミ内でも発表会を開催して院生相互の議論を推進している。また、研究科全体で中間発表会を開催し、複数の教員による研究指導を行っている。 	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
<ul style="list-style-type: none"> 特になし 	
④通常の教育課程や教育方法に加え、COVID-19 への対応・対策として、教育内容、教育方法、成績評価等の一連の教育活動において工夫を講じていますか。行っている場合はその内容と教育活動の効果について教えてください。	
※取り組みの概要を記入。	
<ul style="list-style-type: none"> COVID-19 への対応・対策として、対面事業を行った際にも来日できない留学生に配慮して zoom を併用したハイフレックスで行っている。 オンライン授業の際もグループワーク、ディスカッションを適宜、取り入れて対面授業と遜色ない内容で実施している。 	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
<ul style="list-style-type: none"> 特になし 	
1.3 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	
①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※成績評価と単位認定の確認体制及び方法を記入。	
【修士】 <ul style="list-style-type: none"> 2019 年度から講義科目の成績評価については相対評価を行い、2020 年度から S に限定した相対評価へ変更した。 修士論文に関しては 2020 年度から「群」による採点基準の不均衡性を是正するため、優秀論文賞を「群」ごとに選ぶ方向に変更した。 	
【博士】 <ul style="list-style-type: none"> 上記の評価基準の見直しを行った。 	
【2020 年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
<ul style="list-style-type: none"> 特になし 	
②学位論文審査基準を明らかにし、あらかじめ学生が知ることのできる状態にしていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
※学位論文審査基準の名称及び明示方法を記入。	
【修士】 <ul style="list-style-type: none"> 政策創造研究科 研究科ガイドにて表記している。 	
【博士】 <ul style="list-style-type: none"> 政策創造研究科 研究科ガイドにて表記している。 	
【根拠資料】 ※学位論文審査基準にあたる文書の名称を記入。また、冊子等に掲載し公表している場合にはその名称を記入。	
<ul style="list-style-type: none"> 研究科ガイド 	
③学位授与状況（学位授与者数・学位授与率・学位取得までの年限等）を把握していますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。	
<ul style="list-style-type: none"> 政策創造研究科 研究科パンフレット、研究科ガイドにて表記している。 	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
<ul style="list-style-type: none"> 研究科パンフレット、研究科ガイド 	
④学位の水準を保つための取り組みを行っていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
※取り組みの概要を記入。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【修士】	
<p>・修士論文では、研究科として独自に群ごとに「優秀論文賞」を設け受賞者の栄誉を称えると同時に、論文執筆への動機づけを高めている。2020年度より、当研究科の学際性に鑑み、群ごとの分析手法や独自の視点の重要性を学生に認識し、参考にしてもらうため群ごとに1名ずつ授与した。また、受賞論文を掲載した優秀論文集を次年度院生に配布するにあたっては、受賞論文に加え選外となった論文（匿名）についても講評を行うことにより、修士論文の模範性につき修士課程在籍者の理解が具体的に深まるように配慮している。</p>	
【博士】	
<p>・博士後期課程の修了要件として、査読論文に関し、原著論文1.0ポイント、研究ノート等0.5ポイントの基準で合計2.0ポイント「少なくとも1ポイント分については、博士後期課程在籍中に執筆し、査読雑誌（日本学術会議協力学術研究団体、もしくはそれ相当と認められる団体のもの）に掲載」になっているため、それぞれの学問領域の学会発表、学会誌への投稿を積極的に推奨して、研究水準について外部の評価を受けている。</p>	
【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。	
<p>・「群」ごとの修士論文「優秀論文賞」の新設、博士学位基準の内規「少なくとも1ポイント分については、博士後期課程在籍中に執筆し、査読雑誌（日本学術会議協力学術研究団体、もしくはそれ相当と認められる団体のもの）に掲載」の新設</p>	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
<p>・特になし</p>	
⑤学位授与に係る責任体制及び手続を明らかにし、適切な学位の授与が行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※責任体制及び手続等の概要を記入。ただし、博士については、学位規則のとおりに行われている場合には概要の記入は不要とし、「学位規則のとおり」と記入。</p>	
【修士】	
<p>・各学年において中間発表会を実施。口述試験はテーマに合わせ複数の適切な教員が審査し、最終的に教授会で判定している。2019年度からソフトウェアによる剽窃チェックを実施している。また、作成した修士論文審査基準を活用し、教員間の共通理解を深めた。さらにその運用に基づき、審査基準の修正を行った。</p>	
【博士】	
<p>・「学位規則のとおり」</p>	
【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。	
<p>・ソフトウェアによる剽窃チェックを2020年度も実施した。また、作成した修士論文審査基準を活用し、教員間の共通理解を深めた。さらにその運用に基づき、審査基準の修正を行ったが、まだ改善の余地があるのでさらに努力したい。</p>	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
<p>・特になし</p>	
⑥学生の就職・進学状況を研究科（専攻）単位で把握していますか。	<input checked="" type="checkbox"/> はい <input type="checkbox"/> いいえ
<p>※データの把握主体・把握方法、データの種類等を記入。</p>	
<p>・修了式の時に研究科でアンケートを実施している。</p>	
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。	
<p>・特になし</p>	
1.4 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	
①分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p>	
【修士】	
<p>・2018年度修了生（修士課程）から修了達成度調査（アチーブメント・サーベイ）を実施し、学習成果把握の基礎データを構築している。</p>	
【博士】	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>・それぞれの学問領域の学会発表、学会誌への投稿、研究分野の著作物により、外部からの評価で把握している。</p> <p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>・特になし</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>	
②具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学習成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価室卒業生アンケートの活用状況等。</p> <p>【修士】</p> <p>・修士学生の学習成果達成の測定は、授業における相対評価で行ってきた。2020年度におけるSに限定した授業の相対評価への見直しを行った。修士論文についてはより明確な要件や評価基準が求められるため、中間発表会では評価基準を設け各教員が3段階で評価している。（評価シートは発表後、本人に渡している。）</p> <p>【博士】</p> <p>・博士については、「研究法」、「合同ゼミ」、「外国語文献購読」、「中間発表会」において、それぞれの視点で測定している。</p> <p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>・特になし</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・特になし</p>	
1.5 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。	
①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程及びその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。	<input checked="" type="checkbox"/> S A B
<p>※検証体制及び方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <p>【修士】</p> <p>・大学全体の授業評価に加え、中間発表、紀要などへの論文掲載、学会などにおける発表状況を把握し、学習成果を確認している。そうした状況を踏まえ、教務委員会において科目の新設やカリキュラムの見直しに取り組んでいる。特に、2019年度においては、執行部がゼミ長会から学生のニーズを聴取し、それにあわせて「質的調査法」の2020年度の新設など、教務委員会が行った。</p> <p>【博士】</p> <p>・各専任教員が、それぞれの専門領域における最新動向を把握し、そうした状況を踏まえ、教務委員会において科目の新設やカリキュラムの見直しに取り組んでいる。</p> <p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>・執行部がゼミ長会から学生のニーズを聴取し、それにあわせて「質的調査法」の2020年度の新設など、教務委員会が行った。</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>・シラバス</p>	
②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>・執行部や教授会においてアンケート結果に基づく情報交換を実施し、個別の教員の評価に活かしている。また、教務委員会のカリキュラムの見直しにも活かしている。</p> <p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>・特になし</p> <p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p>	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・特になし

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・外部有識者や予備校などからのヒアリングや、最新動向と学生のニーズを踏まえたタイムリーなプログラムの改廃など、高度な職業能力を有する社会人の教育を行うにふさわしい外部との連携が行われている。修了生の終了後の動向を務めるべくデータベース構築を視野に入れている。	

(3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

政策創造研究科では、修士課程においてはコースワークを基本に据え、加えて修士論文作成と連携させたリサーチワークが効果的に機能している。また、博士課程においてはリサーチワークを中心に、分析手法等をコースワークにより補強している。専門分野の高度化に対応するコースワークの提供ばかりでなく、フィールドワークやリサーチワークとの融合により、一層実践的な高度専門職業能力の醸成を実践している点は評価できる。

グローバル化推進の取り組みとしては、2016年「研究法（中国語）」が追加されたこと、ディレクターやチューターを置き、留学生に履修指導、学習指導、生活相談を提供し、きめ細かい対応を行っていることは高く評価できる。また、コロナ禍においてもハイフレックス授業を取り入れ、対面授業と遜色ない水準を維持していると評価できる。

成績評価と単位認定の適切性については、修士課程、博士課程とも評価基準の見直しを行い、より客観性を担保できるようにした。修士課程では「群」ごとの「優秀論文賞」を新設し、また博士課程では修了要件として査読雑誌への掲載を課すという評価制度を導入し、審査基準を公表することによって、学位の水準を保っている。

学習成果の測定については、授業評価に加え、修了達成調査や学会発表、学術誌への投稿、研究分野の著作物による外部評価を利用することで成果を把握している。こうした点を参考にしながら、常に科目新設やカリキュラム見直しに取り組む姿勢は評価できる。

全体として、外部有識者からのヒアリング、最新動向の把握、大学院生のニーズ等を踏まえて時宜に適ったプログラム改廃等が行われていることは特筆に値する。

2 教員・教員組織

【2021年5月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	
①研究科（専攻）独自のFD活動は適切に行われていますか。	S <input checked="" type="checkbox"/> A B
【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。	
・教員メンバー間で研究交流を実施している。	
【2020年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

<p>・大学でのFDセミナーへ適宜、教員が出席、その情報を教授会で共有している。</p>	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>	
<p>・大学でのFDセミナーへ適宜、教員が出席、その情報を教授会で共有している。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p>	
<p>・特になし</p>	
<p>②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。</p>	<p>S <input checked="" type="checkbox"/> A B</p>
<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>・地域づくり大学院として、研究科ではゼミの枠を越えて研究に取り組める「横断プロジェクト」の制度があり、全国各地でのプロジェクトを年1回それぞれのゼミ主催で行っている。また、横断プロジェクトで連携した企業、地域を軸に研究科主催シンポジウムを行うなど、横断プロジェクトと研究科主催シンポジウムの有機的な連携による社会貢献を実施している。また「政策ワークショップ」などで教員の研究活動や社会貢献等の諸活動を学生に伝えている。</p>	
<p>【2020年度に改善された事項及び新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p>	
<p>・特になし</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p>	
<p>・特になし</p>	
<p>③組織編制やFD等に関して、COVID-19への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。</p>	
<p>※取り組みの概要を記入</p> <p>・大学でのFDセミナーへ適宜、教員が出席、その情報を教授会で共有している。</p> <p>・組織編制やFD等に関して、COVID-19への対応・対策に関しては、教授会で適宜、議論を行っている。</p>	
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入</p>	
<p>・特になし</p>	

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<p>・地域づくり大学院を標榜し、学際的であり、かつ実務に精通した社会人が多いという特徴をいかし、ゼミが主導しつつ、かつゼミの枠組みを越えた横断プロジェクトで、全国各地で社会貢献に取り組んでいる。教員個々の社会貢献活動も積極的に行われている。</p>	

(3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
<p>・地域との連携の実践において研究科全体での取り組みができていない。</p>	

【この基準の大学評価】

政策創造研究科で独自に実施されているFD活動は、教員の資質の向上を図るため組織的、多面的に実行される予定であったが、コロナ禍の下、活発な活動展開が叶わなかったことは残念である。

一方でこうした環境下にあつて、FD委員会が、オンライン授業についての内容確認、改善等を議論し、全学FDセミナー

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

の情報を教授会で共有したことは評価できる。

研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化については、ゼミの枠を超えた横断プロジェクトによって連携した企業、地域を軸にして研究科主催のシンポジウムを実施する、社会貢献に取り組んでいることは高く評価されるべきである。

3 その他の基準の COVID-19 への対応

【2021 年 5 月時点の点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 その他、学生支援や学生の学習環境や教員の教育環境整備、社会貢献における COVID-19 対応・対策を行っているか。

①その他、研究科として学生支援や学生の学習環境や教員の教育研究の環境整備、社会貢献等における COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。

※取り組みの概要を記入

- ・ COVID-19 への対応・対策として、対面事業を行った際も来日できない留学生に配慮して zoom を併用したハイフレックスで行っている。
- ・ オンライン授業の際もグループワーク、ディスカッションを適宜、取り入れて対面授業と遜色ない内容で実施している。
- ・ 授業情報の変更があった場合は学生への迅速な情報伝達を行っている。

【根拠資料】

- ・ 学習支援システム等

【この基準の大学評価】

政策創造研究科は、COVID-19 の対応として、対面授業を実施した場合でも、来日不可能な留学生に対し Zoom による配信を併用したハイフレックス授業を展開し、教育環境の充実に取り組んだことは評価できる。また、授業情報の迅速な伝達により、オンライン授業にあっても、各教員がグループワーク、ディスカッションを適宜取り入れ、対面授業と同等の教育内容・水準の維持に努めたことは評価できる。

III 2020 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	人生 100 年時代におけるグローバル化の進展のもとで、都市・地域・組織が抱える課題について、政策という観点から問題解決能力・合意形成能力・システムデザイン能力を培い、価値観の潮流を先取りした社会を創出できる高度専門人材及び研究者の育成を目的とする。 また、「社会人の学び直し」需要に積極的に応えながら、その実態を把握し、教育・研究の質確保を重視する。
	年度目標	人生 100 年時代という環境を前提に、都市・地域・組織の今日的な課題に貢献できる教育・研究体制づくりを進めることを念頭に、学生のニーズに応じたプログラムの充実を目指す。 また、オンライン授業の適切な運用を図る。引き続き、定員確保を継続していく。
	達成指標	各プログラムについて、学生の意見・要望を重視しつつ充実を図る。オンライン授業の運用状況を評価する。引き続き、留学生の比率を勘案しながら、定員を満たす。
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価
自己評価		A
	理由	ゼミ長会との意見聴取を年間を通して行い、オンライン授業の状況についても意見交換した。その結果、ゼミ長会からの要望としてのハイフレックス授業における集音マイクの設置要望などを研究科長会議でも提起した。オンライン授業については、比較的大学院の授

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

			業は少人数であることから、リアルタイム双方向のオンライン授業がうまく機能した。定員については、定員を超える応募があり、確保見込み。	
		改善策	引き続き、ゼミ長会を通じ学生の意見を聴取し、ハイフレックス、ハイブリッドなど多様で柔軟なオンライン授業の強化を図る。定員確保についても、引き続き強力で推進する。	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	オンライン授業については、ゼミ長会の意見を伺いながらその都度対応してきた。しかし、授業の方法に関して、教員（外部講師）によっては課題のみの授業で学生とのやりとりが十分できていない授業もあり、それについてはまだ十分な対応できていないところもある。留学生の比率については、概ね定員の30%以内を意識し選考を行っている。	
		改善のための提言	こうしたケースが生じた場合には、即座に授業担当教員から意見を聞き状況を把握し、学生の満足度の向上に努める必要がある。ハイフレックスの実施に向けてはハード面の整備はもちろんであるが、教員の習熟及び授業操作のサポート体制の強化が必要と考える。留学生の比率については、引き続き30%以内を順守するよう努める必要がある。	
No	評価基準	内部質保証		
2	中期目標	高度専門職業人及び研究者の育成を実現するためのカリキュラム、教員、学生の支援、研究科としての社会貢献、学習成果などについて、独立した質保証を適切な評価指標に基づき専門的に実施する体制の整備。		
	年度目標	研究科としての社会貢献、学習成果などに関する適切な評価指標を、時代環境の変化にあわせアップデートする。今後のオンラインの運用あり方も検討する。修士論文基準は、再度修正したため、その運用を向上させる。		
	達成指標	今後のオンラインの運用のあり方の方向性作成。再修正した修士論文基準について、その運用による教員の共通理解の醸成。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	S	
		理由	オンライン授業については、大学院は小人数のため、学生の発表機会、発言機会が多く、積極的関与が得られた。その方向で運用する。修士論文基準は理解が醸成され、優秀論文の仕組みを改訂。	
		改善策	オンライン授業の学生の積極関与の運用例をさらに高度化していく。改訂した修士論文優秀賞の運用の定着を図る。	
質保証委員会による点検・評価				
所見	その都度教授会において話し合わせ対応した。修士論文基準は着実に改善し成果が見られる。			
改善のための提言	新しい優秀論文の仕組みは学生の理解を得て、モチベーションを高めることが大切であり、引き続き教授会において話し合いながら共通理解を醸成していく必要がある。			
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】		
3	中期目標	高度専門職業人の育成等、社会的ニーズの変化に対応した群・プログラムの見直しを行う。		
	年度目標	高度専門職業人、研究者向けに、時代に適合したプログラム及び科目の充実を進める。		
	達成指標	各プログラム・科目の履修者数と受講満足度、学生からの意見・要望の評価。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
自己評価		A		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	理由	ゼミ長会との意見聴取を年間を通して行い、オンライン授業の状況についても意見交換した。その結果、ゼミ長会からの要望としてのハイフレックス授業における集音マイクの設置要望などを研究科長会議でも提起した。
	改善策	ゼミ長会からの意見聴取を軸に検討を進めるとともに、秋学期以降復活した授業アンケートも活用して分析を進める。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	概ね良好。
	改善のための提言	学生からの要望に基づき引き続き学生の受講満足度の向上に努める必要がある。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
4	中期目標	コースワークにおける双方向性の確保。各ゼミの特徴を生かしつつ、ゼミ間交流を促進する。
	年度目標	アクティブラーニングのさらなる充実。オンラインにおけるアクティブラーニングのあり方の検討。横断プロジェクトの充実。
	達成指標	オンラインにおけるアクティブラーニングのあり方の方向性作成。横断プロジェクトの内容の多様化の促進。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	オンライン授業については、大学院は小人数のため、学生の発表機会、発言機会が多く、積極的関与が得られた。学生によるグループワークシートの活用によるアクティブラーニングの自発的発生もあった。横断プロジェクトはコロナ禍で規模縮小。
	改善策	オンラインのアクティブラーニングは手応えがあり、学生が独自に生み出す工夫もあったため、それも踏まえて高度化を図る。コロナ禍の状況も踏まえて、横断プロジェクトも展開していく。
	質保証委員会による点検・評価	
所見	オンラインにおけるアクティブラーニングには不慣れな教員が多いのではないかと感じる。	
改善のための提言	教員同士の検討と各プログラムの創意工夫に期待したい。ベストプラクティスの共有が望まれる。	
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標	各プログラムの専門知識の高度化とリサーチワークの基礎となる質的・量的分析手法習得の確実化。
	年度目標	オンライン化した修士の「政策分析の基礎」「政策ワークショップ」と博士の「研究法」を円滑に実施し、分析手法習得の充実をはかる。
	達成指標	オンライン化した「政策分析の基礎」「政策ワークショップ」「研究法」の実施状況を評価する。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
理由	「政策分析の基礎」「政策ワークショップ」は50名前後の大学院としては多人数であるが、オンラインにより活発なグループ討議が実現し、学生の積極的関与が得られた。	
改善策	今後は、ハイフレックスなど対面も含めた柔軟な授業運営が予想されるが、その点の向上も図る。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		質保証委員会による点検・評価		
	所見	「政策分析の基礎」は2018年度から担当教員が分担しそれぞれの専門分野を講義しているが、その成果が学生の分析力の向上に認められる。新規の質的研究法の授業は受講者数が29名に上り、学生のニーズに応えた好例。いずれの科目もオンライン授業で対応することができた。		
	改善のための提言	学生の意見を聞きながら更なる向上に努める必要性ある。		
No	評価基準	学生の受け入れ		
6	中期目標	高度専門職業人の一定割合確保する。多様な人材を積極的に活用できる社会を目指せるようダイバーシティ効果を意識した学生受け入れを行う。(中国→ベトナム)		
	年度目標	専門実践教育訓練給付金制度を活用した社会人学生の確保に向け。ゼミ見学会&模擬授業を、教員による説明会とゼミ見学会に改編して強化する		
	達成指標	改編して強化した「教員による説明会とゼミ見学会」の実施状況と効果を検証する。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	「教員による説明会とゼミ見学会」はオンライン化してもうまく運用でき、個別の教員による説明により入学に結びつくなど、おおいに成果があった。	
		改善策	「教員による説明会とゼミ見学会」も対面とオンラインの組み合わせが想定され、より柔軟な運用を図る。	
質保証委員会による点検・評価				
所見		希望者のあったプログラムでは実施できたが、参加者についてはプログラムによってばらつきがあった。必ずしも旧来のやり方より優れているとは言えず、判断材料が少ない。		
改善のための提言	オンラインによる広報には限界もある。引き続き広報活動によって多くの希望者を掘り起こす必要がある。			
No	評価基準	教員・教員組織		
7	中期目標	現在の研究科の課題に対応できる委員会の設置及び検討・見直し。プログラムの見直しと教員の若返り化・女性教員の比率を考慮した人材の確保(充足)。		
	年度目標	各委員会の一層の活動強化を図るとともに、新設したFD委員会によるFD活動の強化。		
	達成指標	各委員会の活動の評価、特に新設したFD委員会の強化。		
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	新設されたFD委員会は、オンライン授業についての運用確認、改善などの教授会全体での話し合いを企画したほか、全学のFDセミナーの研究科全体への共有の取り組みを行った。	
		改善策	さらにFD委員会の活動を加速させる必要があり、兼任講師なども巻き込み活動を行っている。	
質保証委員会による点検・評価				
所見		コロナ禍にあつて、各委員会は特別な活動ができなかった。		
改善のための提言	FD委員会の更なる活発な活動の必要性がある。定例化は一案となる。			
No	評価基準	学生支援		
8	中期目標	相談体制の充実。研究科同窓会を通じたネットワークづくり。		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

	年度目標	留学生を含めた、ディレクターによる学生との相談、および執行部とゼミ長会による相談体制の充実。同窓会の卒業生との連絡体制の強化。
	達成指標	ディレクター個別相談、執行部とゼミ長会による相談会の実施。同窓会シンポジウムにおける同窓会の卒業生への連絡体制の強化。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	上述のとおりゼミ長会から定期的に意見聴取。同窓会シンポジウムは、同窓会の判断としてコロナ禍を踏まえ中止。その代替として、オンラインの研究科シンポジウムで同窓生に参加呼びかけ。同窓会の連絡網をメールで整備した。
	改善策	コロナ禍の状況をふまえて、同窓会シンポジウムの実施を検討する。
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	その都度実施している。毎年行ってきた同窓会については、感染症拡大の関係で実施することができなかった。しかし、連絡体制に関しては準備会において強化された。
	改善のための提言	引き続き実施する必要がある。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
9	中期目標	政策創造に関して、広く社会に情報を発信するとともに地域まちづくりに貢献する。
	年度目標	2～3回のシンポジウム開催。横断プロジェクトによる地域貢献の充実。各教員を通じた社会貢献の実施。
	達成指標	横断プロジェクトによる地域貢献の充実。研究科主催によるシンポジウムの実施。引き続き、横断プロジェクトと研究科主催シンポジウムの連携も図る。オンラインの研究科シンポジウムやセミナーも検討する。
	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	A
	理由	オンラインの研究科シンポジウムを実施、在学生在が発表するとともに、同窓生も参加した。コロナ禍により、横断プロジェクトの規模は縮小して実施した。
	改善策	コロナ禍により縮小した横断プロジェクトを、コロナ禍の状況をふまえて、拡大を図る。
年度末報告	質保証委員会による点検・評価	
	所見	感染症の影響で横断プロジェクト及びシンポジウムが一部を除き十分に実施できなかった。実施できたシンポジウムにおいては、在学生の発表や役割付与の試みが行われ、それについては高く評価できる。
	改善のための提言	オンラインでの実施を検討するよう努める必要がある。同時に学生の参加意欲を喚起する企画が引き続き重要な課題と考える。
【重点目標】		
<p>「高度専門職業人向けにプログラム及び科目を改廃して、適切に実施する」こと、および「専任教員の分担で、分析手法習得機会の一層の強化をはかる」ためのプログラムの充実を継続しつつ、本年度、緊急的に導入したオンラインの評価、および今後のあり方を検討する。さらに、社会貢献として横断プロジェクトの活用、FDとしての新設したFD委員会の活動充実、学生確保のための改編した教員相談会&ゼミ見学会を充実させる。</p>		
【目標を達成するための施策等】		
<ul style="list-style-type: none"> ・オンラインの今後のあり方の方向性検討 ・横断プロジェクトと研究科主催シンポジウムの連携による社会貢献、地域貢献。 		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・一部、オンラインの研究科シンポジウムやセミナーの実施のあり方も検討する。
- ・新設したFD委員会の機能強化。
- ・改編した教員相談会&ゼミ見学会の充実。

【年度目標達成状況総括】

コロナ禍により、様々なことを検討しなければならない1年間であったが、概ね、目標を順調に達成できた。特にオンライン授業については、大学院の授業人数は少人数であることもあり、リアルタイムで双方向の授業を、予想以上に円滑に実施できた。学生側の発言機会、発表機会も多く、積極的な関与が見られた。これは、社会人学生も多く、オンラインになれていることが一因でもあろう。さらに、秋学期ではハイフレックス授業も実施し、その運用が十分可能であることも検証できた。さらに、学生が自発的にグループワークシートをサーバー上で運用する方法（グループ討議時）を提案するなど、学生の自発的なオンラインアクティブラーニングの提案もみられた。これは、大学院では、オンラインによるアクティブラーニングの開発可能性が大きいことを示している。このような成果に基づき、ゼミ長会との意見交換を軸としつつ、さらに大学院ならではのオンライン授業の高度化を図っていきたい。

【2020年度目標の達成状況に関する大学評価】

政策創造研究科の2020年度目標に対する年度末における自己評価は、理念・目的がA、内部質保証がS、教育課程・学習成果の3項目すべてがA、学生の受け入れがA、教員・教員組織がA、学生支援がA、社会貢献・社会連携がAと所期の目的は十分に達成されている。

「都市・地域・組織がもつ今日的な課題に対する教育・研究体制づくり」を軸に、適切なプロセスを踏んで高度職業人でもある大学院生のニーズに応じた各プログラムの充実が図られたことは、評価できる。特に、オンライン授業を余儀なくされるなかで、ハイフレックス授業の運用可能性を確認したこと、また大学院生によってオンラインアクティブラーニングの提案が示されたこと等は同研究科の質的高度化を目指す契機となることを期待したい。

IV 2021年度中期目標・年度目標

No	評価基準	理念・目的
1	中期目標	人生100年時代におけるグローバル化の進展のもとで、都市・地域・組織が抱える課題について、政策という観点から問題解決能力・合意形成能力・システムデザイン能力を培い、価値観の潮流を先取りした社会を創出できる高度専門人材及び研究者の育成を目的とする。また、「社会人の学び直し」需要に積極的に応えながら、その実態を把握し、教育・研究の質確保を重視する。
	年度目標	地域の衰退を前提に、地域の課題に貢献できる教育・研究体制づくりを進めることを念頭に、学生のニーズに応じたプログラムの充実を目指す。また、オンライン授業の適切な運用を図る。引き続き、定員確保を継続していく。
	達成指標	各プログラムについて、地域の現状把握、分析を行い、学生の意見・要望を重視しつつ充実を図る。オンライン授業の運用状況を評価する。引き続き、留学生の比率を勘案しながら、定員を満たす。
No	評価基準	内部質保証
2	中期目標	高度専門職業人及び研究者の育成を実現するためのカリキュラム、教員、学生の支援、研究科としての社会貢献、学習成果などについて、独立した質保証を適切な評価指標に基づき専門的に実施する体制の整備。
	年度目標	研究科としての社会貢献、学習成果などに関する適切な評価指標を、時代環境の変化にあわせアップデートする。今後のオンラインの運用あり方も検討する。修士論文基準は、再度修正したため、その運用を向上させ、適宜、柔軟に修正していく。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	達成指標	コロナ禍に対応した授業のあり方の方向性作成。再修正した修士論文基準について、その運用による教員の共通理解の醸成。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
3	中期目標	高度専門職業人の育成等、社会的ニーズの変化に対応した群・プログラムの見直しを行う。
	年度目標	高度専門職業人、研究者向けのみならず、学部卒学生にも、時代に適合したプログラム及び科目の充実を進める。
	達成指標	各プログラム・科目の履修者数と受講満足度、学生からの意見・要望の評価。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
4	中期目標	コースワークにおける双方向性の確保。各ゼミの特徴を生かしつつ、ゼミ間交流を促進する。
	年度目標	アクティブラーニングのさらなる充実。オンラインにおけるアクティブラーニングのあり方の検討を継続。横断プロジェクトの充実。
	達成指標	オンラインにおけるアクティブラーニングのあり方の方向性作成の継続。横断プロジェクトの内容の多様化の促進。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
5	中期目標	各プログラムの専門知識の高度化とリサーチワークの基礎となる質的・量的分析手法習得の確実化
	年度目標	オンライン化した修士の「政策分析の基礎」「政策ワークショップ」と博士の「研究法」を円滑に実施し、分析手法習得の充実をはかりながら、ハイフレックスへの対応、対面授業への転換も視野に入れる。
	達成指標	オンライン化した「政策分析の基礎」「政策ワークショップ」「研究法」の実施状況を評価しながら多様化する授業形態に対応していく。
No	評価基準	学生の受け入れ
6	中期目標	高度専門職業人の一定割合確保する。多様な人材を積極的に活用できる社会を目指せるようダイバーシティ効果を意識した学生受け入れを行う。（中国→ベトナム）
	年度目標	専門実践教育訓練給付金制度を活用した社会人学生の確保、外部への働きかけによる学部卒学生の確保を行いつつし、ゼミ見学会&模擬授業を、教員による説明会とゼミ見学会に改編して強化する。
	達成指標	「教員による説明会とゼミ見学会」の実施状況と効果を検証及びそれ以外の学生集めをいかに実施していくかも検証。
No	評価基準	教員・教員組織
7	中期目標	現在の研究科の課題に対応できる委員会の設置及び検討・見直し。プログラムの見直しと教員の若返り化・女性教員の比率を考慮した人材の確保（充足）。
	年度目標	各委員会の一層の活動強化を図る。
	達成指標	各委員会の活動の評価。
No	評価基準	学生支援
8	中期目標	相談体制の充実。研究科同窓会を通じたネットワークづくり。
	年度目標	留学生を含めた、ディレクターによる学生との相談、および執行部とゼミ長会による相談体制の充実。同窓会の卒業生との連絡体制の強化。
	達成指標	ディレクター個別相談、執行部とゼミ長会による相談会の実施。同窓会シンポジウムにおける同窓会の卒業生への連絡体制の強化。
No	評価基準	社会連携・社会貢献

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

9	中期目標	政策創造に関して、広く社会に情報を発信するとともに地域まちづくりに貢献する。
	年度目標	2～3回のシンポジウム開催。横断プロジェクトによる地域貢献の充実。各教員を通じた社会貢献の実施。
	達成指標	横断プロジェクトなどによる地域貢献の充実。研究科主催によるシンポジウムの実施。引き続き、横断プロジェクトと研究科主催シンポジウムの連携も図る。オンラインの研究科シンポジウムやセミナーも検討する。

【重点目標】

より学生にとって魅力的な研究科を目指すべく、プログラム及び科目を改廃して、適切に実施すること、および「専任教員の分担で、分析手法習得機会の一層の強化をはかる」ためのプログラムの充実を継続しつつ、オンラインを含む授業実施形態の多様化への対応の検討を行う。

さらに、社会貢献として横断プロジェクトの活用、各委員会の活動充実、学生確保のための改編した教員相談会&ゼミ見学会を充実させる。

【目標を達成するための施策等】

- ・オンラインを含む授業実施形態の多様化への対応の検討。
- ・横断プロジェクトと研究科主催シンポジウムの連携による社会貢献、地域貢献。
- ・一部、オンラインの研究科シンポジウムやセミナーの実施のあり方も検討する。
- ・各委員会の活動強化。
- ・教員相談会&ゼミ見学会の充実。

【2021年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

政策創造研究科では評価基準の理念・目的、内部質保証、教育課程・学習成果、学生の受け入れ、教員・教員組織、学生支援、社会貢献・社会連携について中期目標（2018—2021年度）を設定し、それらと整合性を保ちつつ2021年度の具体的な目標と達成指標を掲げている。

高度専門職業人の定員を確保し、大学院生との対話を通じたカリキュラムの充実やアクティブラーニング導入の授業方法の改善により、教育・研究水準の質をより高め、都市・地域・組織が抱える課題に解を提示する取り組みは大変優れている。

【大学評価総評】

政策創造研究科が掲げる理念、教育方法、組織運営、社会貢献において着実に質的向上を遂げていることは高く評価できる。コロナ禍のもとで試行されたハイフレックス、ハイブリッド、オンラインアクティブラーニング等の手法は、それらの手法の使い方に長じた社会人を受け入れてきた同科において、今後常態化することが予測される。教育サービスの受け手である大学院生との対話を通じて、従来の各プログラムの充実に加えオンライン授業に関するプラスの特性を充分生かしきることが、同研究科の教育・研究水準を維持し、さらに高めていく一つの要因となりうるだろう。そうした漸進的改善が同科の包括的発展に向けた好循環となりうると期待される。

2021年度は、中期目標の最終年にあたるので、コロナ感染拡大により影響を被ったFD活動の再活性化、社会貢献・社会連携の再強化等を中心とした2021年度目標と調和・融合させ、目標全体の総合的実現に向けて教職員一丸となり取り組まれることを大いに期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 回答欄「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。